



前日のリハーサルでは、何度もフレーズの表情、描写、テンポ、味を変化させていた。曲間には立ち動き、背伸びや足を伸ばし、また椅子に座る。ライブ収録で見られる「はい、本番行きます」のようなやり取りは、ここにはない。ひたすら東先生の納得のいくところまで続き、すべてがベタ録りされた。「今回は徹底的に妥協しない東さんのスタイルが色濃く出ています」とエプソンの谷亀氏。「本番で突然にいいアイデアが浮かぶことがあります、そうなるためには、いつも追求していかないといけません。これを目指すというところまでをやりきらないと、それ以上のアイデアは絶対出てこない。空から降ってくるようなものではないです」と東先生。身を削るようなリハーサルは夜遅くまで続いた



江戸時代の藩校だった三春小学校には、「明徳堂」の門が今も残る。東先生の新しいCDのブックレットでは、門を訪ねる姿が紹介されている



「まほら」の出会い

「滝桜」で全国に名を轟かす三春町のもう一つの宝、それが今回の舞台となる、「三春交流館まほらホール」だ。「まほら」とは古語で「本当に優れた良い場所」という「まほろば」を原語とし、町民公募によるネーミング。2003年、「まほらホール」のこけら落としに招かれ

トーヴェンのピアノソナタ全曲を演奏してみたいですね」と応えたものの、その時点では夢物語に過ぎなかった。

それが、町民のボランティアで組織する「三春交流館運営協会」の主催する自主事業として、正式に東先生に出演依頼があったのが2007年。東先生は、即答を避け、じっくり考えた。32曲を演奏するには、年2回のペースで足掛け5年かかる。労力と手間は、ものすごい。でも城下町で、文化に対する美意識が高いホール側の熱意、そして何よりもホールと一体化したピアノの持つ独特の響きに、とても好印象を持っていた。作りつばなしのホールが多い中、「いいホールになるだろうな」という感触があった。出した結論が「やりましょう、ぜひやらせてください」だった。

ベートーヴェンがSpoken

第1回公演は2008年9月21日。ベートーヴェンが25歳の時に作曲した作品2の第1番、第2番、第3番、そして代表作でもある第23番「熱情」。サブタイトルに「二つの激流」試みと確信」と付けた。

東誠三 ベートーヴェン に挑む。

満開の桜がみごとな福島県田村郡三春町。この地で足掛け5年にわたり、ベートーヴェンのピアノソナタ全曲演奏、そしてライブ録音という長年の夢を実現させている東先生の姿を追った。

たのが、ヴァイオリニストでスズキ・メソッド出身の三浦章広さんと東先生だった。後に二人はチェリストの藤森亮一さんを伴って、ポアヴェール・トリオとして再び米館。その演奏後のレセプションでホールから打診されたのが「何かシリアル物をいかがですか？」という問いかけだった。東先生は「ピアノニストであるからには、いつかベ-

東先生にとってベートーヴェンは、いかなる存在なのだろうか。「いつかは弾いてみたい、という思いは中学生の頃にありました。最初に出会ったへやさしいソナタ」というタイトルのついた作品49の2をはじめ、片岡ハルコ先生のご自宅で、かたはしから聴かせていただきました。その当時、ベートーヴェン研究の草分けで、演奏そのものが規範とされたアルトゥール・シュナーベルの演奏です。曲の持っているスピリットを正確に再現していました。滑稽な曲は滑稽に、シリアスはシリアスに、作品の本質を捉えていたのです。そして、名もない曲が面白かった。もし続けるなら全曲弾かないといけない、と思っただけです」

得てして、日本人にとってのベートーヴェンは、神格化された存在としての側面が大きい。〈耳が不自由であるにも関わらず、苦悩に直面した崇高な人生観を世に問うた〉という図式は定番となっている。しかし、東先生はベートーヴェンの人間臭い部分、もっと滑稽なところにも光を当てていくべきと考えた。「遺言をどう存知ですか? 『諸君、喜劇は終わらだ』というものでした。



三春交流館「まほら」ホール(上)と当日のスタッフの皆さん(左)。「この町は特別。町は滝桜の観光客でにぎわっているけれど、空気は変わらない。浮わついた感じがしない。そこが素晴らしい」と東先生

この記事は、スズキ・メソッドの会員向け季刊誌が第4回公演(2010.4.25)取材したときのものです。ちなみに、東誠三先生は、スズキ・メソッドで育ちました。



演奏後は、三春交流館運営協会のスタッフ、横浜と仙台の東誠三ファンクラブ、エブソンの谷亀氏（前列右から4人目）らが東先生を囲んだ。運営協会は、福島県立田村高校の学生や、近隣の小学生を連れてきて、今のうちからいい音楽を生で聴かせるなど、種まきを盛んに行なっている。月1回、20ヵ月連続してベートーヴェン・プロジェクトの会議をするなど、その熱意と温かさはコンサートに結実していた

ライブの魅力

第4回公演となった2010年4月25日の曲目は、第15番、第16番、第17番「テンペスト」、第18番で、サブタイトルは「ベートーヴェンと文学・演劇」だった。ステージでは2本のマイクが東先生の演奏をキャッチ、楽屋に待機する録音エンジニアたちがライブで収録していた。そう、このシリーズはすべてライブ録音としてエブソンがCD化、作品2を収録した第一弾が3月に発売されたばかりだ。レコーディング・プロデューサーを務めるエブソンの谷亀氏は、東先生とは20年来の仲。その魅力をこう語る。

「人生のステップを慌てず急がず、自分のペースで着実に歩んできた誠実さが、端正な演奏スタイルから滲み出てきますし、音楽家としての経験に裏打ちされた確かな知識、その昇華した知性と感性のバランスは飛び抜けて優れています。また、クラシック音楽への強い探究心と枯れることのない憧憬の思いを、ピアノという楽器を駆使してストイックに昇華させていく、冷静かつ熱狂的なパワーを持つて

います」と絶賛。さらに「さまざまに聴き手がそれぞれの身の丈で共感できる心に届く音、音楽を奏でられる熱い心を持つ」とも。音楽の専門家をして、そこまで惚れ込ませる東先生の魅力たるや相当なもの。日本のベテランと若手演奏家の記録に取り組むエブソン・クラシックCDは、一人1点ずつのリリースが大半であること、を考えると、東先生のケースが例外であることが容易に分かる。

「ピアノist東誠三の点から線への記録、さらに面への拡がりのある記録を意図しています。また、同時に作曲家であるベートーヴェンの多様な魅力をお伝えできる作品創りも意図しています」と谷亀氏。そして「スズキ・メソッドの子どもたちこそ、聴いてほしい」というお話は、こちらも大きく共感できる。ピアノ科の生徒に限らず、ヴァイオリン科、チェロ科、フルート科の生徒たちにも、改めて東先生のチャレンジをつぶさにたどることは、とても必要に思う。

第5回公演は2010年9月12日。CDをきっかけに生演奏に触れてみてはいかがだろうか？ 演奏家の真摯な姿に心打たれるはずだ。



東誠三「ベートーヴェンピアノソナタ第1集〜魂に刻まれた音の記憶〜」TYMK-02301 定価：2,730円 発売元：セイコーエブソン株式会社 才能教育研究会本部事務局のほか、全国の大規模CD店でも取り扱っています。

サイン会にも多くの聴衆が並んだ。この日は、4回連続聴かれたお客様に東先生のサインとイラストのついた色紙プレゼントも行なわれていた。また、事前にはスタッフによるミニ勉強会「ベートーヴェンちょっといい話」を実施するなど、「まほら」ホールの温かみのあるアイデアが随所にあった。この他、福島民報で1月から東先生が執筆をスタートした「ベートーヴェンの世界によろこ」の連載記事など、地元紙もバックアップに力を注いでいる。連続演奏会は2012年3月25日まで続く



第15番～第18番の演奏では、ウィットに富んだところなど多彩なペーターヴェンが垣間みられた。アンコールの「7つのバガテル op33-5」も非常に面白い演奏で、聴衆の喝采を受けていた



演奏前のプレトークは初回から実施。本番を聴く直前に、ワンプレーズだけでも聴いておくと「なるほど」と思える。30分で、きっかり終わられるよう、ホテルの部屋で練習を重ねるとい

ベートーヴェンとの対話

実際に、東先生はどのようにペーターヴェンに向き合っているのだろうか。アプローチを聞いてみた。「まず、楽譜を黙読します。聴かずに読みます。音を想像する作業です。頭の中で弾いていて手も動いていません。アレグロならアレグロの速度で。時間はかかりますが、

私はそれを大切にしています。その時点で読み込めなかったものは、正しく弾けませんから。現実として、どういう響きになっていなければいけないかまで黙読するのです。音の高さやテンポだけではありません。それが終わってから音を出します。これは一つの作業で、ピアノという楽器は、その作業に耐えられないと弾けません。作業は、ルーティンワークです。言ってみれば、道端のゴミ掃除と同じです。避けて通れないものです。

その黙読で、構成の8割が決まります。あとは、それが実現できているか確かめる作業で、肉体に習熟させるのです。黙読しながら「このフレーズはどうするの？」と聞くと、作曲家は必ず答えてくれます。肝心なのは、問いかけをどれくらい持てるか。演奏家より作曲家の方が、創作のためにずっと精力を使っていますから、作曲家がなぜこの音を選んだか、選ぶためにどれだけエネルギーを使ったかに気づくと、これは心の底から大切に扱わないといけないと思いますよ。全面的に向き合っていないか、とても申し訳ないという気持ちに、自然となりますから」

東先生の音の美しさは定評のあるところだが、演奏姿勢の美しさにも、いつも感服する。「思うに、動きやすい姿勢であると思います。武士の所作というのもそれでしょう。剣にすべての力を伝えるベストの姿勢です。人間が道具を使って伝える、楽器も肉体を使ってすることですから、そういう面があつて当然だと思います。いい姿勢は見ても違和感がないことで、無理がないことでもあります。そこに合致して心を込めてこそ、いい音が出るので、履き違えてはいけません。形から入っても、形だけで終わる危険性もある。音楽をやるには、気持ちがかもというのが根底です。込めようと思つたら姿勢も、きちんととなります」

